

陸前高田の小6女兒ら 兵庫で来春ミュージカル主演

東日本大震災で両親を亡くした陸前高田市の小学6年の女兒らが兵庫県芦屋市で来春、ミュージカルの主役を務めることになった。放射能汚染と戦争、家族の絆をテーマにした創作劇だ。コーラスグループには、福島第一原発の事故後に関西に避難している人たちも参加する。

【根本太一】

ミュージカルは、アンデルセンの童話にヒントを得た創作劇「雪の女王」。地球を放射性物質で汚した人間に怒った女王が子どもたちを連れ去り、除染が進む10万年先まで眠りにつかせようとする。親たちは救出に向かうが、果たして——というあらすじだ。

芦屋市の声楽家、檀美知生さん(68)と、元神戸市立中学教諭の村嶋由紀子さん(67)夫妻が、脚本と演劇、歌唱指導の全てを担当する。村嶋さんは阪神大震災後、教え子たちの心のケアに奔走してきた。東日本大震災後の2011年から、2人は陸前高田を度々慰問に訪れ、被災者との交流を育む懸け橋役となってきた。

その中で震災遺児の女兒3人は夫妻と出会った。4

震災遺児 逆境負けず稽古



放射能汚染と家族の絆テーマ

年前に地元で開かれたイベントの合唱で、天使のような歌声を披露。才能をさらけ出したと考えた夫妻から、創作劇の出演を誘われた。「面白そう」と仮設住宅に住むいとこたちも加わった。ひたむきで逆境に立ち向かう姿は、地元や関西の観衆を涙させてきた。

「歌と芝居で人々を魅了する喜びを支えにし、家族を失った衝撃を乗り越え成長した」。村嶋さんはその

今回の出演は4作目。女兒らは上演予定の来春4月2日の後に中学校に進学する。忙しさが増すこともあった。今回が「卒業」舞台に

村嶋さんはこれまで、劇の舞台を主に陸前高田に置いてきたが、今回は「放射能汚染」のテーマも加えた。関西にいる福島からの避難者から「今も苦しむ私たちが

「苦しみが続く現実を伝えたい」とコーラスグループに参加した。

連日の猛暑にもかかわらず、政府が電力需給に触れないことも、河村さんは気になる。「原発が止まっても電気は十分ある。なのに再稼働の動きは進む。福島

原発事故の避難者らも参加

のに再稼働の動きは進む。福島

今月6日、子どもたちは村嶋さんと共に稽古に励んでいた。仙台市で両親と姉を失い、陸前高田の祖父母宅で生活している熊谷海音さん(12)らは「広島

故も、学校で習っていないのでよく知らない」と照れつつ「しっかりと練習して、私たちが震災に負けないことを伝えたい」と話した。

村嶋さん(右)の書き下ろしの台本を手に、演技の練習に励む子どもたち。陸前高田市コミュニティホールで